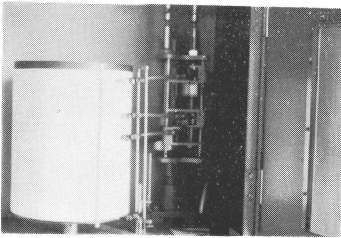
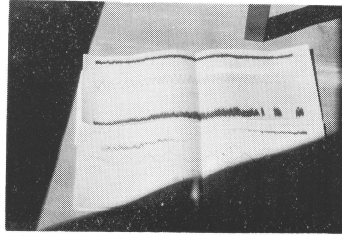


ユーゴスラビアの気象事業（その2）

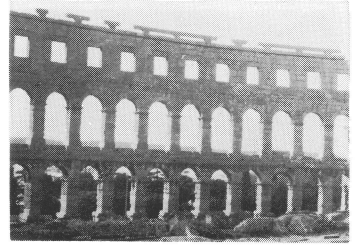
本文 356 頁参照（大井正一）



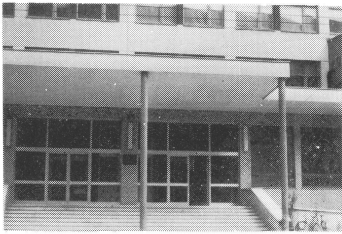
No. 21. Kleinschmitt 型. 自記風向風速計（Pula 測候所）



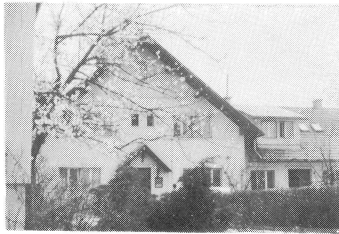
No. 22. Kleinschmidt. 自記風向風速計に印されたボラの記録（Pula 測候所）



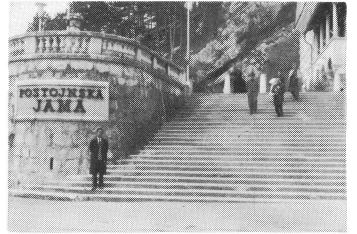
No. 23. Pula の Awphitheather. 何年頃に誰が何の目的で建てたものか今日迄定説がない。



No. 24. Ljubljana. 大学気象学教室。



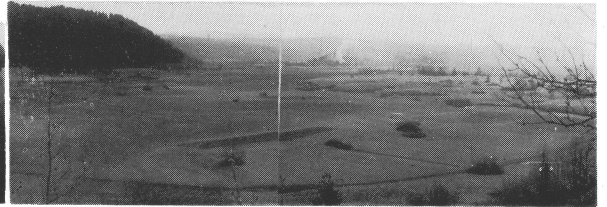
No. 25. 桜の花咲く Ljubljana 気象台。



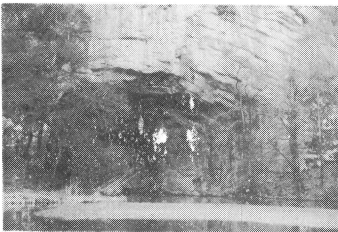
No. 26. 世界的名声ある Postojna 洞窟。入口は小さいが内部には、20 km に及ぶ電車が走っている。目下複線工事中で入れなかった。



No. 27. 水が引き始めた湖、やがて乾上るとブドウ畠になると云う（Cerkljica 付近）。右は水理課長 Bernof 氏。



No. 28. こゝでは湖が完全に干上つて、これから耕作が開始されようとしている。（Cerkljica 付近）



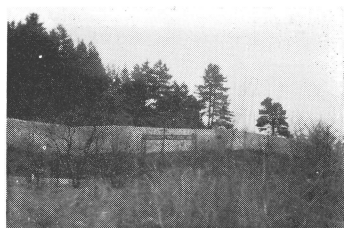
No. 29. Karst 地帯に見られる典型的な川のトンネル。（Cerkljica 付近）



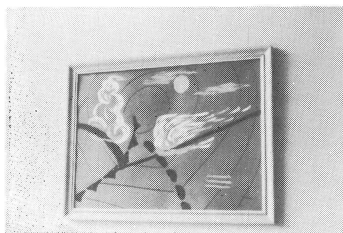
No. 30. 第二次大戦犠牲者の墓に詣でる Ljubljana 気象台長 Ostanek 氏。氏は稀なる親日家で私も大変御世話になった。左は鎖に繋がれた女学生の像。こうした遺跡は各地に見られた。



No. 31. Pula 測候所より見たイストリア半島の要港、日本の遠洋漁船も時々立ち寄ると云う。



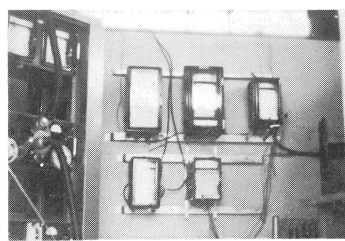
No. 32. ボラによる列車の脱線の顛覆を防ぐため各所に石垣が築かれている。如何に石の国とは云え此の費用は大変なものだと云う(Ljubljana)



No. 33. コーゴー人では芸術が盛んである。これは地域コンクールに入選した Ljubljana 大学気象学科教授 Zdravko 博士の象徴画。



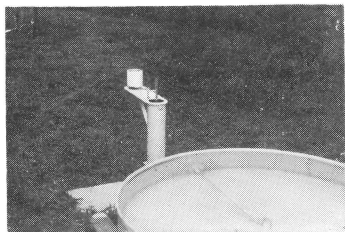
No. 34. Beograd 気象研究所の観測塔。



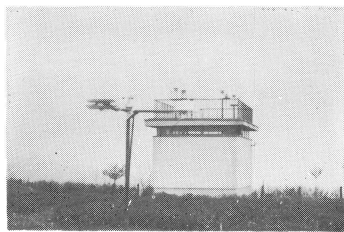
No. 35. 放射線自動週期分析記録装置、各元素の減衰率の変化から含有率を求める。(Beograd 気象研究所)



No. 36. Beograd 気象測器研究所。



No. 37. 大型蒸発計の自記部。(Beograd 気象研究所)



No. 38. 自記式地面及天空輻射計。向うは日射計及び放射線自働分析装置の部屋。(Beograd 気象研究所)



←No. 39. Beograd 全ユーゴー気象庁管理部。



No. 40. 新しく出来つつある Novibeograd 市。



No. 41. Karst 地帯では川はしばしばこのように山の中に流れ込んで何処に流れて行くのか判らなくなってしまう。(Cerknica 付近)



No. 42. Beograd の前身である古都 Zemun から見ると左にドナウ川が流れ、中央には三角洲の向うに要塞公園を囲んで現在の市の中心が拡がっている。その右には共産党の高層建築の右に白く光って官庁街が見え、右端には新しい Novibeograd の高層アパート街が林立している。